

令和元年度(2019年度)秋季特別展

大塩平八郎展

四海困窮いたし候はば・・・

令和元年(2019年)10月19日(土)~12月1日(日)



大塩平八郎像(成正寺蔵)

天保8年(1837)2月19日、元大坂町奉行所与力で陽明学者の大塩平八郎が乱を起こしました。天保の飢饉に苦しむ民衆救済のため、門下の与力、同心、近郷の富農らとはかり、「四海こんきういたし候ハ、天禄ながくたゝん」に始まる有名な檄文^{げきぶん}を大坂周辺の百姓に配布し、貧農や貧民などへ呼びかけ決起しましたが、1日で幕府方に鎮圧されました。平八郎は、大坂近郷の富農と交遊があり、吹田村や吉志部村^{きしべ}にも来て、書などを残しています。幕府役人だった彼がなぜ乱を起こしたのか、その経緯を彼の書状や書、関連資料から紹介します。(当館学芸員 池田直子)

大塩平八郎

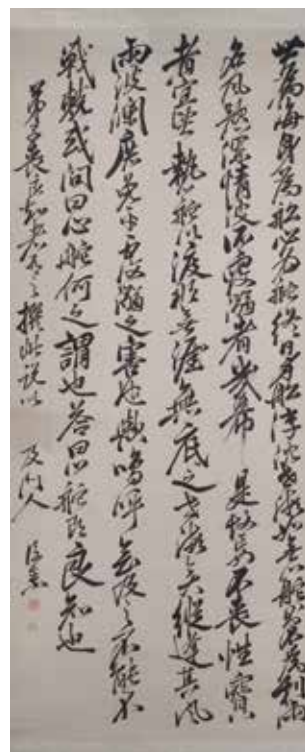
大塩平八郎は、寛政5年(1793)大塩敬高の子として大坂天満に生まれました。諱は後素、字は子起、号は連斎、中軒、中斎といいます。先祖は駿河・遠江の守護今川氏の一族であったと言われています。幼くして父母を亡くし、祖父政之丞に養育されました。13、4才ごろから東町奉行所に見習いとして出仕して以降、精勤し、キリシタン逮捕・^{かんり}奸吏糾弾・破戒僧処断など、難事件を処理し名与力として知られました。学問では陽明学を修め、学者としても知られており、早くから^{せんしんどう}洗心洞と名付けた私塾を開き、同僚の子弟や大坂近郊の^{やましろのかみさねのり}富農に教えを説いていました。東町奉行高井山城守実徳は平八郎の意見を尊重し、平八郎を重用しましたが、天保元年(1830)高井山城守が辞職した際に平八郎も辞職しました。以後、家塾で学問に専念し、『古本大学^{こほんだい}割目』や『洗心洞^{せんしんどう}箴記』などを著しました。

写真の書「弟子に与える説」では、世間を海、身を船、心を舵に例えています。心の舵をしっかりととかたく執れば転覆することなく恐れることはない、心の舵とは即ち良知である、と記しています。平八郎門人政野儀次郎の親族に伝えられたこの書の石刷(大阪城天守閣所蔵)がよく知られていますが、原詩ともいえるこの作品が新たに確認され、『大塩研究』第79号(2018年)で紹介されています。平八郎の教えがよく表されているといえます。

天保7年(1836)の大飢饉の際に、高井山城守の後任^{あとへ}跡部山城守^{よしすけ}良弼は、平八郎の窮民救済策を取り上げず、有効な対策をとりませんでした。平八郎は、蔵書を売り払った代銀620両を窮民1万人に金1朱つつ分け与えました。跡部山城守が大量の米を買い付け江戸に送ったり、大坂市中の豪商たちは豪奢な生活を送ったり、米を買い占めて米価をつり上げたりしていました。ついに、平八郎は奸吏や豪商に天誅を加え、窮民を救うことを決意しました。「四海こんきうい

世為海身為船心為舵、終日身船浮沈世海、如無心舵則不為利雨
名風慾瀾情波所覆溺者幾希、是故妄不喪性實
者宜堅執心舵以渡那無涯無底之世海矣、縱逢其風
雨波瀾、庶免乎覆溺之害也歟、嗚呼念及之不能不
戰兢、或問曰心舵何之謂也、答曰心舵即良知也、
弟子喪良知者有之撰此說以^戒及門人 後素(朱印)(白印)

大塩平八郎書
「弟子に与える説」
(山本善一郎氏所蔵)



たし候ハ、天禄ながくたゝん」にはじまる有名な檄文を摂津・河内・和泉・播磨の百姓に配付し決起を呼びかけ、天保8年(1837)2月19日に、門下の与力・同心や近在の富農らと兵を挙げました。しかし、奉行所側との兵力差は大きく、夕刻には鎮圧されました。乱によって起こった火災は翌20日まで続き、1万世帯以上の人々が焼け出されました。その後厳しい探索が行われ、自首・自殺・逮捕される者が続出し、平八郎・格之助父子は3月27日大坂油掛町の町屋で捕吏に包囲され自殺しました。

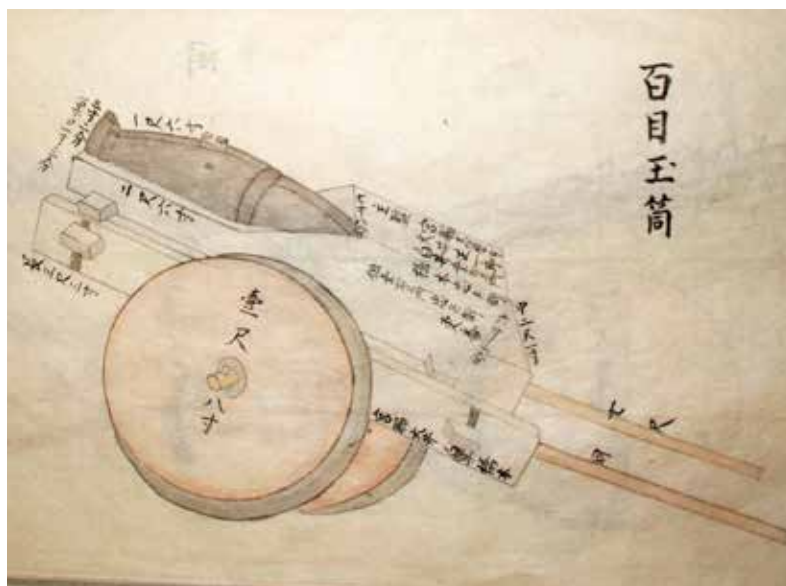
この乱ののち、越後柏崎の乱、摂津能勢の騒動などが起こっており、当時の人々に大きな衝撃を与えたことがわかります。

(当館学芸員 池田直子)

大塩平八郎の乱と宮脇志摩

大塩平八郎の乱は、大坂市中で起こりましたが、吹田や周辺の村からも百姓が参加したと言われています。吹田村西宮神社（現泉殿宮）の神主であった宮脇志摩もその一人です。志摩は平八郎の叔父にあたります。通称を権八郎といい、平八郎より4才下で、文政2年（1819）西宮神社の神主の宮脇日向の養子となり、宮脇理加と結婚し神主となりました。志摩の次女いくは天保3年（1832）平八郎の養女となっています。次頁で紹介するように、平八郎と志摩と吹田村庄屋の橋本清太夫は交遊がありました。平八郎が吹田村周辺で教えを説いたり門人たちを獲得したのは、志摩の支援もあったのでしょう。

乱の当日、天保8年（1837）2月19日午前10時頃、志摩は天満に火事があると聞き、具足櫃や槍を担がせて長柄村の渡し場まで駆けつけました。しかし、すでに乱は鎮圧されていたため引き返し、午後4時頃に自宅へ戻ったようです。奉行所方に情報が漏れ、平八郎が決起を早めたため志摩は乱に加わることができなかったのです。しかし、大砲の車台には志摩の名前がはっきりと書かれており、彼が一味であることは逃れようがありませんでした。翌20日には捕吏に家を包囲され、志摩は切腹したものの傷は浅く、家族の制止を振り切って家を飛び出し、21日、



『出潮引汐奸賊聞集記』（大阪歴史博物館蔵）

庄本村（現豊中市）のため池で水死体で発見され、志摩の妻子4人がとられました。別府村の「朝」という者が乱に参加し、捕吏が宮脇家を取り囲んだときに鉄砲で抵抗したという記録もあり、農民から参加する者もあったことがわかります。また、近在百姓30余人が竹槍を持って参加したとして「手鎖」の刑を受け、また人足に出た90余人も「重敲き」の刑にあったといえます（『吹田市史第2巻』）。

志摩は、後に捕まった平八郎らとともに、死体を磔にされました。当時の刑罰は当人だけでなく家族にも及ぶため、長男発太郎は天草島に、次男新次郎は壹岐に、三男辰三郎は隠岐に流されました。明治時代になって赦され、三男辰三郎（志津摩）が宮脇家を相続して泉殿神社の神主となっています。

（当館学芸員 池田直子）



宮脇発太郎赦免状（宮脇一彦氏所蔵 当館寄託）

大塩平八郎と郷土橋本家



橋本清太夫手記（橋本正永氏所蔵）

吹田村や吉志部村^{きしべ}などには、大塩平八郎と交友のある者が多くいました。平八郎は吹田に交遊し、吉志部村中西家など旧家に彼の書を残しました。吹田村の旗本竹中領の庄屋を務めた橋本清太夫とは親しく、平八郎が彼に宛てた年不詳4月15日付の手紙が残されています。「この間は、大勢まかり出、大いに御馳走ありがたく存じ候、（略）別して深謝奉り候、はばかりながら御家内様に宜しき様、御伝声希い上げ候、十七日は御約束通り志摩御召し連れ、御出あそばし待ち奉り候、委細磯五郎に申し含め置き候につき、御聞きくださるべく候」とあり、平八郎と橋本家、宮脇家の親交がうかがえます。文中の磯五郎とは清太夫の子で、弟文三郎とともに平八郎の門下生でした。二人は「読礼堂掲示」を書き残しています。磯五郎と文三郎は文政8年（1825）正月に「読礼堂掲示」を書いており、その時期に入門したと考えられます。その最後に文政8年4月の日付と「洗心洞」という名称が書かれており、亘節氏は、平八郎は「読礼堂」と称する私塾を開き、のち「洗心洞」に改称したのではないかと推察されています（『吹田志稿』）。橋本清太夫の手記（写真）には、子^{ねどし}年（文政11年カ）5月12日に、

一、五月十二日朝、井内様江大塩先生方掛け物差遣被成候二付取次、磯五郎持参致入、則井内様之御意入御悦じ被遊候由、中飯方出坂致候ハ、代銀持参致呉候、猶又大塩氏へも礼書状御遣し被成度被仰聞候由、（略）扱大塩先生之掛け物之礼状并代銀御陣屋方大塩氏へ届け呉候様、磯五郎呼来ル、即刻、御陣屋へ罷出候、（後略）

大塩平八郎の井内左門（竹中領吹田村支配役）への掛け軸の贈り物を磯五郎が取り次いで届けたことが記されています。

橋本家は大坂夏の陣で竹中氏とともに徳川方について軍功があ

り、豊臣秀吉、徳川家康等戦国武将の古文書を有する家柄で、江戸時代は竹中領の庄屋を勤めました。文政2年（1819）、橋本家は領主旗本竹中氏より家伝の文書群の提出を求められ、かわりに居屋敷の年貢免除と苗字帯刀を許した免許状を与えられました。ところが、文政12年（1829）10月、竹中氏は清太夫と磯五郎の役儀をとき放って百姓身分に落とし、天保3年（1832）11月、竹中氏は文政2年の免許状を取り上げました。橋本家では免許状を取り上げられては由緒家たる家名を証するすべがなくなるとして、天保4年、磯五郎は江戸の老中へ駕籠訴に及びました。寺社奉行の裁決により、免許状は清太夫のもとに戻り、橋本家は由緒家として郷土の身分を取り戻しました。主君の横暴に対して幕府への直接の訴えに及んだのは、平八郎の門下で教えをうけていたためでしょう。

磯五郎と文三郎は、橋本家の取り潰しの難のためか、平八郎が乱を起こした頃には洗心洞を脱退していたようで、乱には加わっていません。しかし、大塩平八郎の乱にはやはり強い関心があったのでしょうか。平八郎の檄文の写しが残されています。（当館学芸員 池田直子）



令和元年(2019)7月18日、大塩事件研究会の会長でもある藪田貫さんにお話をうかがいました。

**藪田 貫(やぶた ゆたか)**

大阪大学大学院修士課程修了後、大阪大学助手、京都橘女子大学助教授を経て、関西大学文学部教授。平成26年(2014)より兵庫県立歴史博物館館長。専門は日本近世史。

中牧：秋季特別展では大塩平八郎を取り上げます。藪田先生には、大塩関連、特に吹田とのつながりについてうかがいたいと思います。まず、なぜ大塩に関心を持ったか教えていただけませんか。

藪田：私は大阪の生まれです。大塩は教科書にも登場しますので知ってはいましたが、研究しようと思うことはありませんでした。ですが、昭和50年(1975)11月に大塩事件研究会が酒井一先生を会長に創立されました。当時、私は大阪大学で助手になっていました。私の恩師の脇田修先生と酒井先生は京都大学の友人です。酒井先生が脇田先生を研究会に誘ったのですが、脇田先生は「大塩は嫌いや」と言って、私が代わりに研究会へ参加することになりました。

そのとき脇田先生が大塩を嫌う理由を明確に言っていたか記憶はありませんが、昨年、脇田先生がお亡くなりになり、追悼文を書くときにご著書を読んだところ、そのことが書いてありました。「町を焼いたことが許せない」と。

それから、もう一つ嫌う理由があるようです。大塩の三大功績の一つに文政10年(1827)のキリシタ

ン検挙事件があります。その逮捕者の中に徳島出身の医者で蘭学者の藤田顕蔵ふじた けんぞうという人物がありますが、藤田は大塩のキリシタン検挙事件で一味と見なされ、獄中で拷問を受けて死んでいます。言わば藤田顕蔵は大塩の被害者です。

脇田先生は、大坂を「町人の都」と捉えて、その商業的・文化的な成熟度から考えたときに、なぜ大塩のような人物が生まれたかが理解できなかったのではないのでしょうか。大塩の行為を賞賛する人もいますが、大阪の大きな流れから見ると不協和音的です。それで「嫌い」と思われたのではないのでしょうか。

中牧：歴史家には大塩を嫌う人が多いですか？

藪田：多いですね。逆に傾倒する人も多くて両極端です。大阪では脇田先生のように批判的な視点を持っている方が多いと思います。司馬遼太郎さんは一切、扱っていません。

中牧：藪田先生のご著書『武士の町 大坂』(中央公論新社、2010年)では司馬遼太郎さんの作品にもふれて、大坂の武士の人数を再考していますね。

藪田：『武士の町 大坂』を書いたとき、いわゆる「異端児」として大塩だけ見ていては仕方がないと思いました。まず「普通」の状態を知り、なぜ大塩のような人物が生まれたかを考えなければなりません。与力60騎のなかの1騎、しかも270年でたった1人そういう人物が出ただけです。大坂の武士の比重や存在など、まわりの侍のことがわからなければ、大塩を非難も顕彰もできません。大坂の武士の裾野を知りたかったんです。

◆
中牧：ご著書では、木村兼葭堂きむら けんかどうと増山雪斎ましやま せつさい(正賢)の交友関係にも言及していますね。伊勢長島藩主の雪斎が江戸だけでなく、大坂に来る機会があったこともこの本でよく解りました。

藪田：宮本又次先生以来、江戸時代に武士が大坂に来るきっかけは蔵屋敷でした。諸藩の人が多数、大坂の蔵屋敷に来ていました。その一方で、大坂城には外様でなく譜代など將軍家に近い大名・旗本たちも来ていました。これについて関心があまりなかつ

たのは、江戸にすぐ帰ってしまうことも理由でしょう。

伊勢長島藩は大坂に蔵屋敷を持たず、大坂城を蔵屋敷のように使っています。つまり、藩主は参勤交代で、伊勢長島と江戸を往復しているだけではなく、時々、もう一カ所、大坂城に駐留するのです。それを大坂加番といいます。こういったことを含め、徳川の大坂城については、あまり研究されていませんでしたが、90年代から大阪城天守閣が中心となり、大坂城の守衛体制がどのようなになっていたか、人事データを元に研究しはじめました。

中牧：幕府は、大坂の基本的な人事データをつくっていたのですね。

藪田：そうです。^{なにわおんやくろく}『浪華御役録』というデータは、町方・城方双方の人事データですが、その重要性に最初に気付いたのは、大阪城天守閣初代館長で、大塩事件研究会顧問でもあった岡本良一氏です。大塩は反逆者でもあり、爆死してしまうので関連の記録がほとんど残っていませんが、『浪華御役録』という摺物を使うと、大塩がどのようなキャリアパスをしていったかがわかります。享保年間くらいに民間の本屋の手で出されはじめて、次第に整備され、正月と八朔の年二回出されるようになり、徳川幕府が倒れる慶応4年(1868)まであります。ところが、大塩は町方与力ですので、大塩に注目しただけではいつまでたっても城の中は見えてきません。

一方、木村蒨堂の日記からは城の中の様子がわかります。増山雪斎は生涯に3度大坂に来ていて、そのうち1年間の駐留の日々が蒨堂の日記とぴたり合うのです。

伊勢長島藩増山家は知行高2万石で、大坂城に駐留する7つの大名家の常連の一つです。彼の父親も大坂に行っているのです。雪斎は自分が藩主になったら大坂に行くチャンスがあることを知っています。大坂に行けば木村蒨堂に会えることも。不定期ですが、何代にもわたって藩主が来るのがわかっているのですから、交友関係は恒常的だったでしょう。実際、雪斎が大坂城に駐留すると、早速、蒨堂の大坂城通いが始まります。武士である雪斎は軍事拠点である大坂城勤務のために来ているわけですから、持場から離れられません。

ところが、町人が城内の藩主発行のパスポートを

持って入ることができるので、蒨堂は足繁く、城内の雪斎の許に通うのです。もちろん雪斎のリクエストに応じ、蒨堂の集めた『本草図譜』などのコレクションを持参して。

中牧：町人と武士が、それほど仲が深いことに驚きます。

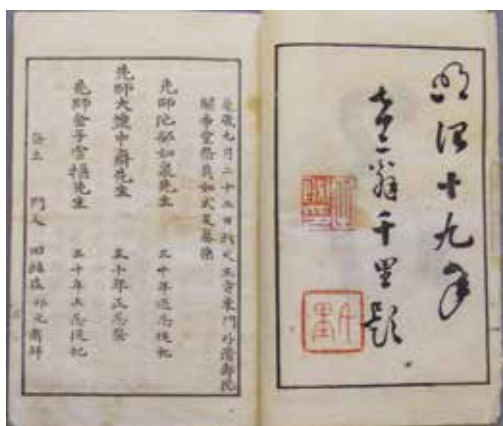
藪田：商業というレベルで言えば、町人は富を生み出してお金を貸す側で、武士たちはお金を借りる側です。つまり対立しています。ところが、そこに文化という側面があり、両者を繋ぎます。大坂を「町人の町」とも「武士の町」とも考えられるのは、私塾が数多くあって、琴棋書画の世界があり、そこで文化的な交流が展開されていたからです。それが木村蒨堂の日記にあらわれています。蒨堂は商売をやりながら、さまざまな文化人と付き合います。「文化人」とは、町人も武士も身分の関係なく、特定の関心でつながれた人々のことです。伊勢長島藩主増山雪斎はじめ、蒨堂という一人の人間の世界のなかに、どれだけいろんな人が出入りしているかを示しているのが、この日記のすごいところだと思います。



中牧：増山雪斎は文人画家という一面があります。その弟子の一人が金子雪操です。彼は江戸に生まれ、雪斎の手ほどきを受け、めぐりめぐって吹田に定着した文人画家です。

藪田：吹田で大塩展を行うのでしたら、ぜひ金子雪操にも触れてしてほしいと思っています。大塩はいわば反乱を起こした人間ですが、それ以前の大塩は明らかに文人です。文人大塩の記憶を持っている人による語りが残っています。

大塩が親しくしていた伊勢の平松楽斎という学者がいますが、平松のような同世代の人たちは事件の後、だんまりを決め込みます。反乱者と関わっていたと思われたくないので、どのような付き合いがあったか語りません。逆に田結^{たいのしょうせんり}莊千里や田能村^{たのむら}直入^{ちよくにゅう}は、世代が一つ下だったので、何が起こったかは知った上で自分の師匠だという見方を持続し、明治維新以降、大塩について語りはじめます。明治19年(1886)、金子雪操の30回忌と大塩平八郎の50回忌を合わせた展覧会を田結莊千里が企画しています。「行雲流水」はそのときの目録です。なぜ



行雲流水（藪田貴氏蔵）



大塩事件研究会が発行する『大塩研究』の創刊号と最新号

なら田結荘は乱で、師である大塩を亡くし、自身も拷問を受けますが、その後、藤沢東暎に学び、さらに「絵も学ぶなら」と雪操の門人となったからです。

中牧：吹田市の橋本家には、息子2人が大塩に弟子入りしたことを示す史料が残っています。

藪田：今回、橋本家に注目するのは新しい切り口で面白いと思っています。橋本家は、領主である江戸の旗本竹中氏が、その歴史の古さに嫉妬するほどの家で、吹田の成り立ちそのものにも関わりがあります。その旧家が、大塩と縁があったというのは注目すべきことですね。

江戸時代、大坂とその周辺には、武士的な感覚を持っている人たちが多数いました。そのような人たちと大塩の共鳴関係みたいなものがありそうです。大塩は武士的な伝統を大事に持っている旧家の人々に門人になってほしかったのではないのでしょうか。

中世の大坂は、楠氏や三好・畠山氏らがいて、武士的な伝統がいっぱいある世界だったと思うんです。その後、豊臣・徳川の代となり、武士的な伝統を持つ旧家も百姓や町人の身分になりますが、武家との出会いがあると、もともと武士であったという記憶が蘇ってくるわけです。与力にも関わらず大塩も、出自にこだわり、ご先祖様が北条攻めの時に殊勲をあげたという二百数十年前の出来事を誇りに思っていました。しかもそれは尾張宗家の大塩のことで、自分はその分家です。

大塩は原点回帰をして、もともと武家であった橋本清太夫家に共鳴したのではないかと思います。

中牧：大塩事件研究会には学者もいますが、民間の人たちも参加していますね。

藪田：そうです。私は大阪的だと思っています。大塩だけではなく、豪商淀屋や適塾などいろんなことに関心を持っている会員が多くて、歴史と文化を楽しんでいます。「町人学者」と呼ばれていた伝統が大阪のまちに残っているのではないのでしょうか。

会員のなかには、画像化された大塩のイメージを集めている人がいますが、何を透過するかで全く異なります。嵐寛寿郎が演じる映画「天満水滸伝」の大塩は、学者として描かれ、先鋭的に走る門人たちを抑えきれなくなり、乱を先導するいという姿です。

中牧：森鷗外にも大塩の作品がありますね。

藪田：森鷗外は作家ですので、2月19日の朝から描きます。人物像ではなく、出来事そのものを浮かび上がらせます。私たち歴史家とは違いますね。

大砲で軍事行動を起こして船場の豪商を焼き討ちし、蔵から出てきた金と米などをみんなに分けるとい、一種の義賊のイメージで描いた世界です。その背景には、米騒動などの社会問題が大きくなった大正期の世相があると思います。歴史は、後でどのように見られるかによって描かれ方が違います。事件をどの時代の、どのアングルで見るかは別として、大塩は常に語られています。おもしろいところですね。語られるイメージの豊かさから考えると、大塩は何人いるのだろうかというくらい本当に様々です。

中牧：未来ヘレガシーとして残していく必要があります。これからもぜひ先生にアドバイスをいただきたいです。本日はありがとうございました。

令和元年度(2019年度)秋季特別展 「大塩平八郎展 四海困窮いたし候はば…」 関連イベント

オープニングイベント

10月19日(土) 午後1時～2時20分

開会式・オープニングコンサート

歌／山崎芳智子氏

楽器演奏／小西幸男氏

会場／2階講座室

定員／先着120名

参加費／無料

10月19日(土) 午後2時30分～3時30分

展示解説

解説／当館学芸員 池田直子

会場／3階特別展示室

講演会

11月3日(日) 午後2時～3時30分

「大塩中斎哲学の核心

・・・日本的陽明学とはなにか」

講師／京都大学大学院人間・環境学研究所

教授 小倉紀蔵氏

11月9日(土) 午後1時30分～2時30分

「天満の乱 ー大塩平八郎と坂本鉦之助ー」

講師／武具武装研究家・なんでも鑑定団

鑑定士 澤田平氏

12月1日(日) 午後2時～3時30分

「大塩平八郎の『文』と『武』ー『政事』への飛躍ー」

講師／大塩事件研究会会長・兵庫県立歴史

博物館館長 藪田貫氏

いずれも会場／2階講座室 定員／120名

参加費／無料

歴史講座

10月27日(日) 午後2時～3時30分

「大塩平八郎と吹田ー宮脇志摩と郷土橋本家ー」

講師／当館学芸員 池田直子

11月30日(土) 午後2時～3時30分

「大塩平八郎と大坂画壇」

講師／当館学芸員 河島明子

いずれも会場／2階講座室 定員／120名

参加費／無料

上映会

10月20日(日) 午後2時～4時

「風雲天満動乱」・「大塩平八郎と民衆」

解説／大塩事件研究会

会場／2階講座室

定員／120名

参加費／無料

他にも現地見学会、体験講座があります。詳しくは、ホームページをご覧ください。

講談

10月26日(土) 午後2時～3時

「大塩平八郎・天保八年二月十九日決起す!」

出演／講談師 旭堂南海氏

会場／2階講座室

定員／120名

参加費／無料

館長ギャラリートーク

11月9日(土) 午後2時45分～3時45分

講師／当館館長 中牧弘允

会場／3階特別展示室

参加費／無料。観覧料が必要

クイズラリー

11月16日(土)・11月17日(日)

午前10時～午後4時

会場／3階特別展示室

吹田市立博物館ボランティア有志の会(景品あり、随時受付)

【交通案内】(当館ホームページもご参照ください。)

- JR岸辺駅下車北口から徒歩20分。
- JR吹田駅北口・阪急吹田駅から
「千里中央」ゆきバス「紫金山公園前」下車徒歩4分。
「五月が丘南」循環バス「五月丘西」下車徒歩7分。
「桃山台駅前」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分。
- JR吹田駅中央口・阪急吹田駅から
「桃山台駅前」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分。
- 阪急南千里駅から
「JR吹田」ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分
- お車の場合は、五月が丘方面からお回りください。
(吉志部神社側からは車は進入できません。)

